

学生生活のある 2 時点における平均以上効果の検討

—— 入学直後と最初の夏期休暇前の比較 平均的他者の抽象性を考慮して¹ ——

田 端 拓 哉

1. 問題と目的

これまで、特に精神的健康との関連において、客観性が高くバランスのとれた自己認知ではなく、肯定的な方向に偏った自己認知こそが自己認知の基本的な有り様であるという論が展開されてきた (e.g. Taylor & Brown, 1988)。Alicke (1985) が示した平均以上効果 (better-than-average effect) は、そのような肯定的な方向に偏った自己認知を実証する現象の 1 つと考えられる。平均以上効果は、望ましい特性は平均的他者より自己にあてはまり、望ましくない特性は自己より平均的他者にあてはまるというように、自己を平均よりもよいものととらえる傾向である。

平均以上効果は必ずしもロバストな傾向ではなく、自己の側面などによって表れ方が異なり、評価基準を曖昧にしやすい側面で平均以上効果が表れやすいということが示されてきた (伊藤, 1999; 外山・桜井, 2001)²。また、Alicke, Klotz, Breitenbecher, Yurak, & Vredenburg (1995) は他者の抽象性が低くなるほど、その他者と比べた場合の自己をよく評価する傾向が低下することを実験によって示している。このことから、たとえば学生の入学直後と夏期休暇前を比べると、夏期休暇前は入学直後に比べて平均以上効果が表れにくい可能性が考えられる。なぜならば、入学直後は学校全体やクラスの成員の特性について情報が少なく抽象性が高いが、夏期休暇前にはある程度特性の情報を得て抽象性が低下しているはずだからである。しかし上に挙げたいずれの研究も、この在学期間による他者の特性の抽象性が変化する可能性を考慮していない。

平均以上効果の安定性を検証するには要因の統

制が不可欠であるが、平均以上効果で使用される、自己との比較対象である平均的他者のワーディングは一定していない。Alicke et al. (1995) の平均的他者のワーディングは、Alicke (1985) と同じく 'average college student' のみで使用されているが、日本の研究では「自分と同性の同年齢の平均的な大学生」(伊藤, 1999)、「同じ大学に通う一般的な大学生」(外山・桜井, 2000)、「同じ大学に通う一般的な同性の大学生 (または専門学校生)」(外山・桜井, 2001) というようにワーディングが一定していない。Alicke et al. (1995) が述べるように比較される他者の抽象性が自己と他者の比較に影響するのならば、平均的他者のワーディングは統制されるべきではないか。

また、平均的他者の抽象性によって平均以上効果が影響されるならば、ワーディングによって調査対象者にもたらされる表象の抽象性がどのように変化するのかその程度も検討しなければならないのではないだろうか。

以上の問題点を踏まえ、本研究は第一に、入学直後と最初の夏期休暇前の平均以上効果の比較を目的とする。具体的には、短期大学入学直後の初回の講義と、最初の学期が終了して夏期休暇が近づく最終回の講義の 2 回に平均以上効果の調査を行い、その結果を比較した。夏期休暇前までに他者の抽象性が低下していれば、平均以上効果は入学直後に比べて低下しているはずである。平均以上効果の測定は Alicke (1985) に倣い、自己と平均的他者について特性語のあてはまりを尺度により評定させ、各評定値の差を求めることで行った。重要な側面でなければ全体的な自己評価に影響しないということが指摘されていることから

(遠藤、1992b；伊藤、1999；溝上、1999)、特性語には山本・松井・山成(1982)の自己認知の重要視される諸側面を用いることで、できるだけ多くの調査対象者にとって特性の重要性が高くなるようにした。

第二の目的は、平均的他者の抽象性をどのように表現すると平均以上効果が最も表れやすいか検討を行うことである。平均的他者の抽象性による平均以上効果の表れ方を比較するために、平均的他者のワーディングを抽象性の高いと思われる順に、「平均的な他者」、「平均的な短大生」、「あなたと同学科の平均的な短大生」(以下それぞれ「平均的他者」、「平均的短大生」、「平均的同学科生」とする)の3種類とし、それぞれについて平均以上効果の検討を行った。Alicke et al. (1995)らを鑑みれば、「平均的他者」と比較したときに最も強く平均以上効果が表れ、反対に「平均的同学科生」との比較時に平均以上効果が最も弱くなり、「平均的短大生」との比較時はそれらの中間の程度の平均以上効果がみられると考えられる。

また、ワーディングによってもたらされる表象の抽象性のばらつきを検討するために、比較対象である各平均的他者について想起した内容を回答させた。回答は抽象性を分析しやすくするために、選択肢の中から選択する方法と自由記述による回答を併用した。選択肢は抽象性が低いと思われる順に「知っている1人」、「知っている複数の人」、「実在しない想像した人」の3種類と、「その他」を加えた4つを用いた。平均的他者の抽象性が高ければ「実在しない想像した人」、反対に抽象性が低ければ「知っている1人」を選択する割合が高くなると考えられる。

2. 方法

(1) 質問紙

① **評定対象(比較対象)**：自己と、その比較対象となる「平均的他者」、「平均的短大生」、「平均的同学科生」の4種類の対象について特性語にどの程度当てはまるかを「7、非常に当てはまる」～「1、非常に当てはまらない」の7件法で評定

させた。自己評定として「あなたにどの程度当てはまるか」、平均的他者評定として「平均的な他者にどの程度当てはまるか」、平均的短大生評定として「平均的な短大生にどの程度当てはまるか」、平均的同学科生評定として「あなたと同学科の平均的な短大生にどの程度当てはまるか」を回答するように求めた。

② **評定項目**：山本・松井・山成(1982)の自己認知の諸側面の、「性」の側面を除いた10側面の32項目を用いた。

③ **比較対象の内容**：比較対象となる「平均的他者」、「平均的短大生」、「平均的同学科生」について、評定時にどのような人物像を想像したかを選択肢の中から回答するように求めた。選択肢は「1、知っている1人」、「2、知っている複数の人」、「3、実在しない想像した人」、「4、その他」の4種類であり、選択した内容の人物について自分との関係(たとえば友人、知り合い、恋人など)を自由記述するように求めた。

(2) 調査期間

比較のために2回の調査を行った。1回目の調査は入学直後として2004年4月12日に、初めての心理学の講義受講時に実施した。2回目の調査は短期大学の夏期休暇前として同年7月23日に、1回目と同じ心理学の講義時に実施した。

(3) 調査対象者

大阪府のS短期大学生。1回目の調査は88名(女性60名、男性28名)、2回目の調査は81名(女性55名、男性26名)に調査を行った。

(4) 手続き

教示、対象ごとの特性の当てはまりの評定、比較対象の内容の回答、プロフィールの回答の順になった質問紙の冊子を作成し、講義時に一斉に配布、回収した。評定対象の回答順はランダム化した。

3. 結果

(1) 比較対象の内容

回答方法を間違えた者、回答に欠損があった者を分析の対象から除いた。また、「1. 知っている1人」と回答した対象者（1回目の平均的他者の評定時5名、平均的短大生の評定時4名、平均的同學科生の評定時5名、2回目の平均的他者の評定時5名、平均的短大生の評定時5名、平均的同學科生の評定時4名）も、「4. その他」と回答した対象者（1回目の平均的他者の評定時3名、平均的短大生の評定時7名、平均的同學科生の評定時6名、2回目の平均的他者の評定時7名、平均的短大生の評定時8名、平均的同學科生の評定時1名）も少なかったため、「1. 知っている1人」は「2. 知っている複数の人」と合わせて「知っている人」とし、「3. 実在しない想像した人」は「想像した人」として、「その他」は分析から除いた。その結果、比較対象ごとの「知っている人」と「想像した人」の数は Table 1、Table 2 のようになった。

二項検定の結果、1回目も2回目もほぼ同じ傾向で、平均的他者の内容は「想像した人」が少し多いように見えるが「知っている人」と有意な差はなかった。平均的短大生の内容は、2回目のみが有意な差であり ($p < .05$)、1回目は有意傾向 ($p < .10$) ではあるが、1回目も2回目も一貫し

て「知っている人」よりも「想像した人」のほうが多いという傾向は一致していた。一方、平均的同學科生の内容は1回目も2回目も有意に「想像した人」よりも「知っている人」が多かった ($p < .01$)。

(2) 平均以上効果

① 分析の対象：回答方法を間違えた者、回答に欠損があった者を除き、また、比較対象の内容について分類できない「4. その他」を選択した者を除いて、最終的に55名（女性35名、男性20名、平均年齢19.7歳）を分析の対象とした。

② 自己－他者得点の検討：自己評定値から比較対象ごとの評定値を引いたものを自己－他者得点（範囲は±6.0）とする。1回目と2回目の調査それぞれについて、対象とその内容ごとに分類して、側面全体および側面ごとに0を帰無仮説とするt検定（両側）を行った（Table 3～5）。側面は全て肯定的であるため、自己－他者得点が0よりも有意に高ければ平均以上効果が生じていたと考えられる。また、反対に自己－他者得点が0よりも有意に低ければ、平均以上効果の反対の傾向が生じているとして平均以下効果が表れていると考える。

Table 3 の1回目の調査の結果をみると、「平均的他者」と「平均的同學科生」との比較時

Table 1 1回目の比較対象の内容ごとの度数

	知っている人	想像した人	二項検定
平均的他者	32	43	n.s.
平均的短大生	26	45	*
平均的同學科生	61	10	**

** $p < .01$ * $p < .05$ + $p < .10$ n.s. not significant

Table 2 2回目の比較対象の内容ごとの度数

	知っている人	想像した人	二項検定
平均的他者	31	39	n.s.
平均的短大生	24	45	*
平均的同學科生	66	10	**

** $p < .01$ * $p < .05$ + $p < .10$ n.s. not significant

Table 3 自己-他者得点

	平均的他者		平均的短大生		平均の同学科生	
	知人 (N=24)	想像した人 (N=31)	知人 (N=22)	想像した人 (N=33)	知人 (N=45)	想像した人 (N=10)
1回目	-0.58** (0.84)	-0.30* (0.70)	-0.20 (0.73)	-0.27+ (0.82)	-0.49** (0.78)	-0.70** (0.57)
	平均的他者		平均的短大生		平均の同学科生	
	知人 (N=25)	想像した人 (N=30)	知人 (N=18)	想像した人 (N=35)	知人 (N=46)	想像した人 (N=9)
2回目	-0.39* (0.79)	-0.36** (0.60)	-0.10 (0.79)	-0.37** (0.63)	-0.60** (0.68)	-0.72* (0.61)

() 内の値は S.D. ** $p<.01$ * $p<.05$ + $p<.10$ n.s. not significant

に一貫した有意な平均以下効果がみられた ($t(23) = 3.36, p<.01, t(30) = 2.39, p<.05, t(44) = 4.25, p<.001, t(9) = 3.93, p<.01$)。比較対象が「平均的短大生」であるときは、内容が「想像した人」である場合に有意傾向の平均以下効果がみられた ($t(32) = 1.88, p<.10$)。2回目の調査では、内容が「知っている人」である「平均的短大生」以外において有意な平均以下効果がみられた ($t(24) = 2.43, p<.05, t(29) = 3.26, p<.01, t(34) = 3.42, p<.01, t(45) = 5.97, p<.000001, t(8) = 3.51, p<.05$)。

1回目の調査の側面ごとの結果についてTable 4をみると、有意に平均以上効果が生じているのは「まじめさ」の側面において内容が「想像した人」である「平均的短大生」と比較したとき ($t(32) = 2.86, p<.05$)、「優しさ」の側面において内容が「想像した人」である「平均的他者」と比較したとき ($t(30) = 2.16, p<.05$) と、同じく内容が「想像した人」である「平均的短大生」と比較したとき ($t(32) = 2.42, p<.05$) の3種類だけであり、有意傾向も「優しさ」の側面において内容が「知っている人」である「平均的短大生」と比較時だけであった ($t(21) = 1.91, p<.10$)。「まじめさ」の側面においては、内容が「想像した人」である「平均的他者」、内容が「知っている人」である「平均的短大生」、内容が「想像した人」である「平均の同学科生」も

正の値ではあるが、統計学的に有意ではなかった。「まじめさ」の側面では内容が「想像した人」である「平均の同学科生」との比較時においてのみ、有意に平均以下効果が生じていた ($t(9) = 3.64, p<.05$)。「優しさ」の側面においては、内容が「知っている人」である「平均的他者」と内容が「想像した人」である「平均の同学科生」が負の値であったが、統計学的に有意ではなく、内容が「知っている人」である「平均の同学科生」との比較時のみ平均以下効果が有意であった ($t(44) = 2.09, p<.05$)。

他の結果について側面ごとに端からみると、「生き方」では全体に負の値になっているが、統計学的に有意であったのは内容が「知っている人」である「平均的他者」と比較時 ($t(23) = 2.12, p<.05$)、同じく内容が「知っている人」である「平均の同学科生」との比較時 ($t(44) = 3.07, p<.01$) の2種類だけであった。内容が「想像した人」である「平均的短大生」との比較時は有意傾向だった ($t(32) = 2.01, p<.10$)。「学校の評判」の側面では、統計学的に有意であったのは内容が「知っている人」である「平均的他者」と比較時 ($t(23) = 2.45, p<.05$)、同じく内容が「知っている人」である「平均の同学科生」との比較時 ($t(44) = 3.17, p<.01$)、内容が「想像した人」である「平均の同学科生」 ($t(9) = 2.74, p<.05$) の3種類であった。「経済力」の側

Table 4 1 回目の側面別の自己－他者得点

		生き方	学校の評価	経済力	社 交	趣味や特技
平均的他者	知人 (N=24)	-0.64* (1.47)	-0.74* (1.47)	-0.03** (1.13)	-0.65* (1.22)	-0.28 (1.64)
	想像した人 (N=31)	-0.15 (1.25)	-0.30 (1.15)	-0.95** (1.27)	-0.46+ (1.34)	0.03 (1.41)
平均的短大生	知人 (N=22)	-0.44 (1.40)	-0.27 (1.17)	-0.71+ (1.67)	-0.50+ (1.25)	0.03 (1.31)
	想像した人 (N=33)	-0.49+ (1.41)	-0.15 (1.15)	-1.07** (1.36)	-0.91** (1.36)	0.31 (1.73)
平均的同学科生	知人 (N=45)	-0.59** (1.30)	-0.47** (0.99)	-0.76** (1.25)	-0.54* (1.46)	-0.04 (1.42)
	想像した人 (N=10)	-0.37 (0.94)	-0.67* (0.77)	-1.23* (1.18)	-0.58 (1.31)	-0.40 (0.86)
		スポーツ能力	知 性	まじめ	優しさ	容 貌
平均的他者	知人 (N=24)	-0.22 (1.56)	-0.76* (1.33)	-0.01 (0.92)	-0.14 (0.85)	-1.39** (1.36)
	想像した人 (N=31)	-0.25 (1.53)	-0.53* (1.03)	0.32 (1.28)	0.58* (1.50)	-0.27* (1.51)
平均的短大生	知人 (N=22)	0.08 (1.52)	0.00 (1.40)	0.44 (1.48)	0.58+ (1.41)	-0.17** (1.21)
	想像した人 (N=33)	0.05 (1.57)	-0.22 (1.37)	0.73* (1.46)	0.51* (1.20)	-0.32** (1.53)
平均的同学科生	知人 (N=45)	-0.36+ (1.37)	-0.70** (1.27)	0.05 (1.58)	-0.37* (1.19)	-1.19** (1.48)
	想像した人 (N=10)	-0.28 (1.22)	-1.43** (0.96)	-1.07* (0.93)	-0.37 (1.02)	-0.83* (0.88)

() 内の値は S.D. ** $p<.01$ * $p<.05$ + $p<.10$ n.s. not significant

面でも全てが負の値であり、内容が「知っている人」である「平均的短大生」との比較時が有意傾向 ($t(21) = 2.00, p<.10$)、内容が「想像した人」である「平均的短大生」との比較時が有意 ($t(32) = 4.53, p<.0001$) であった他は、比較対象と内容にかかわらず平均以下効果の傾向が有意であった ($t(23) = 4.44, p<.001, t(30) = 4.14, p<.001, t(44) = 4.09, p<.001, t(9) = 3.32, p<.05$)。「社交」の側面でも全てが負の値であり、内容が「知っている人」である「平均的他者」との比較時 ($t(23) = 2.59, p<.05$)、内容が「想像した人」である「平均的短大生」との比

較時 ($t(32) = 3.83, p<.001$)、内容が「知っている人」である「平均的短大生」との比較時 ($t(44) = 2.51, p<.05$) が有意であり、内容が「想像した人」である「平均的他者」との比較時 ($t(30) = 1.91, p<.10$)、内容が「想像した人」である「平均的他者」との比較時 ($t(21) = 1.87, p<.10$) が有意傾向であった。「趣味や特技」の側面には統計学的に有意な傾向はみられず、「スポーツ能力」の側面では内容が「知っている人」である「平均的同学科生」との比較時に平均以下効果の有意傾向がみられただけであった ($t(44) = 1.75, p<.10$)。「知性」の側面では「平

均的短大生」との比較時以外で平均以下効果の傾向が有意であった ($t(23) = 2.82, p < .05, t(30) = 2.84, p < .05, t(44) = 3.67, p < .001, t(9) = 4.74, p < .01$)。「まじめさ」と「優しさ」の側面は前述のとおりである。「容貌」の側面では対象とその内容にかかわらず全てに有意な平均以下効果がみられた ($t(23) = 5.00, p < .0001, t(30) = 4.68, p < .0001, t(21) = 4.52, p < .001, t(32) = 4.97, p < .0001, t(44) = 5.37, p < .00001, t(9) = 3.00, p < .05$)。

次に2回目の調査の側面ごとの結果について Table 5 をみると、有意に平均以上効果が生

じているのは1回目とはほぼ同様の、「まじめさ」の側面において内容が「想像した人」である「平均的短大生」と比較したとき ($t(34) = 2.12, p < .05$)、「優しさ」の側面において内容が「想像した人」である「平均的短大生」と比較したとき ($t(29) = 2.78, p < .05$)、同じく内容が「想像した人」である「平均的短大生」と比較したとき ($t(34) = 3.84, p < .001$) の3種類と、1回目では有意傾向であった、「優しさ」の側面の内容が「知っている人」である「平均的短大生」と比較時であった ($t(17) = 2.73, p < .05$)。「まじめさ」の側面では内容が「想像した人」である

Table 5 2回目の側面別の自己-他者得点

		生き方	学校の評価	経済力	社 交	趣味や特技
平均的 他 者	知人 (N=25)	-0.44+ (1.08)	-0.17 (0.95)	-1.03** (1.18)	-0.39 (1.12)	-0.07 (1.05)
	想像した人 (N=30)	-0.40+ (1.12)	-0.42* (0.90)	-0.91** (1.24)	-0.90** (1.41)	0.03 (1.38)
平均的短大生	知人 (N=18)	-0.30 (1.00)	0.09 (1.07)	-0.89* (1.26)	-0.67* (1.15)	0.30 (1.18)
	想像した人 (N=35)	-0.49+ (1.44)	-0.10 (0.91)	-1.27** (1.58)	-1.21** (1.61)	-0.02 (1.04)
平均的同学科生	知人 (N=46)	-0.50** (1.12)	-0.44** (0.80)	-0.96** (1.06)	-0.86** (1.26)	-0.12 (1.17)
	想像した人 (N= 9)	-0.74* (0.85)	-0.33 (1.01)	-0.70* (0.84)	-0.97+ (1.48)	-0.48 (0.93)
		スポーツ能力	知 性	まじめ	優しさ	容 貌
平均的 他 者	知人 (N=25)	-0.03 (1.29)	-0.65* (1.26)	-0.12 (1.55)	0.33 (0.94)	-1.11** (1.58)
	想像した人 (N=30)	-0.04 (1.33)	-0.36+ (1.04)	0.03 (1.26)	0.48* (0.94)	-1.00** (1.11)
平均的短大生	知人 (N=18)	0.13 (1.62)	0.00 (1.29)	0.31 (1.54)	0.85* (1.32)	-0.76* (1.41)
	想像した人 (N=35)	0.15 (1.56)	-0.09 (1.25)	0.48* (1.33)	0.70** (1.07)	-1.70** (1.62)
平均的同学科生	知人 (N=46)	-0.32+ (1.26)	-0.98** (1.18)	-0.43+ (1.61)	-0.38* (1.11)	-0.96** (1.55)
	想像した人 (N= 9)	-0.89* (0.88)	-0.67 (1.37)	-1.19* (0.97)	-0.15 (0.73)	-0.93** (0.57)

() 内の値は S.D. ** $p < .01$ * $p < .05$ + $p < .10$ n.s. not significant

「平均的同学科生」との比較時においてのみ、有意に平均以下効果が生じているほか ($t(8) = 3.65, p < .05$)、内容が「知っている人」である「平均的同学科生」との比較時では平均以下効果の有意傾向がみられた ($t(45) = 1.83, p < .10$)。「優しさ」の側面においては、内容が「知っている人」である「平均的同学科生」との比較時のみ平均以下効果が有意であった ($t(45) = 2.34, p < .05$)。

他の結果について側面ごとに端からみると、「生き方」の側面において統計学的に有意であったのは内容が「知っている人」である「平均的同学科生」と比較時 ($t(45) = 3.02, p < .01$)、内容が「想像した人」である「平均的同学科生」との比較時 ($t(8) = 2.63, p < .05$) の2種類であった。内容が「知っている人」である「平均的他者」との比較時 ($t(24) = 2.03, p < .10$)、内容が「想像した人」である「平均的他者」との比較時 ($t(29) = 1.95, p < .10$)、内容が「想像した人」である「平均的短大生」との比較時 ($t(34) = 2.00, p < .10$) は有意傾向だった。「学校の評判」の側面では、統計学的に有意であったのは内容が「想像した人」である「平均的他者」と比較時 ($t(29) = 2.57, p < .05$)、同じく内容が「知っている人」である「平均的同学科生」との比較時 ($t(45) = 3.73, p < .001$) の2種類であった。「経済力」の側面では対象とその内容にかかわらず全てに有意な平均以下効果がみられた ($t(24) = 4.36, p < .001, t(29) = 4.02, p < .001, t(17) = 2.99, p < .05, t(34) = 4.76, p < .0001, t(45) = 6.11, p < .00001, t(8) = 2.51, p < .05$)。「社交」の側面でも全てが負の値であるが、内容が「想像した人」である「平均的他者」との比較時 ($t(29) = 3.49, p < .01$)、内容が「知っている人」である「平均的短大生」との比較時 ($t(17) = 2.47, p < .05$)、内容が「想像した人」である「平均的短大生」との比較時 ($t(34) = 4.46, p < .0001$)、内容が「知っている人」である「平均的同学科生」との比較時 ($t(44) = 2.51, p < .05$) が有意であり、内容が「想像した人」であ

る「平均的他者」との比較時 ($t(9) = 1.39, p < .10$) が有意傾向であった。1回目と同様に「趣味や特技」の側面には統計学的に有意な傾向はみられず、「スポーツ能力」の側面では内容が「想像した人」である「平均的同学科生」との比較時に平均以下効果 ($t(8) = 3.04, p < .05$)、内容が「知っている人」である「平均的同学科生」との比較時に平均以下効果の有意傾向がみられただけであった ($t(45) = 1.83, p < .10$)。「知性」の側面では内容が「知っている人」である「平均的他者」との比較時 ($t(23) = 2.82, p < .05$)、「知っている人」である「平均的同学科生」との比較時 ($t(45) = 5.61, p < .00001$) で平均以下効果の傾向が有意であり、($t(29) = 1.87, p < .10$)。「まじめさ」と「優しさ」の側面は前述のとおりである。「容貌」の側面では1回目と同様、対象とその内容にかかわらず全てに有意な平均以下効果がみられた ($t(24) = 3.49, p < .01, t(29) = 4.92, p < .0001, t(17) = 2.28, p < .05, t(34) = 6.21, p < .000001, t(45) = 4.23, p < .001, t(8) = 4.86, p < .01$)。

③ 1回目と2回目の自己－他者得点の比較

平均以上効果の検討と同じ対象55名について、各側面において、比較対象（平均的他者、平均的短大生、平均的同学科生）と調査時期（1回目、2回目）と内容（知っている人、想像した人）を要因とする3要因分散分析を行った。

結果から、側面全体において比較対象の主効果が有意であった ($F(2,318) = 5.77, p < .01$)。LSD法による多重比較の結果、「平均的短大生」との比較時が「平均的他者」と「平均的同学科生」が比較対象のときより自己－他者得点が高かった ($LSD = 0.31, p < .05$)。「平均的他者」と「平均的同学科生」との比較対象には得点に差がなかった。「学校の評判」において比較対象の主効果が有意であった ($F(2,318) = 3.22, p < .05$)。LSD法による多重比較の結果、「平均的短大生」が「平均的同学科生」との比較時より自己－他者得点が高かった ($LSD = 0.31, p < .05$)。「平均的他者」と「平均的同学科生」との比較対象には得

点に差がなかった。また「平均的他者」と「平均的短大生」との比較対象にも得点に差がなかった。「スポーツ能力」において比較対象の主効果が有意であった ($F(2,318) = 3.18, p < .05$)。LSD法による多重比較の結果、「平均的短大生」が「平均的同学科生」との比較時より自己－他者得点が高かった ($LSD = 0.43, p < .05$)。「平均的他者」と「平均的同学科生」との比較対象には得点に差がなかった。また「平均的他者」と「平均的短大生」との比較対象にも得点に差がなかった。「知性」において比較対象の主効果が有意であった ($F(2,318) = 10.06, p < .01$)。LSD法による多重比較の結果、「平均的短大生」との比較時が「平均的他者」と「平均的同学科生」との比較対象より自己－他者得点が高かった ($LSD = 0.37, p < .05$)。「平均的他者」と「平均的同学科生」との比較対象には得点に差がなかった。「まじめさ」において比較対象の主効果が有意であった ($F(2,318) = 13.45, p < .01$)。さらに比較対象と内容の交互作用が有意であった ($F(2,318) = 4.03, p < .05$)。そこで単純主効果を求めたところ、内容が「知っている人」である「平均的同学科生」は内容が「想像した人」である「平均的短大生」との比較時より自己－他者得点が高かった ($F(2,318) = 9.47, p < .01$)。「優しさ」において比較対象の主効果が有意であった ($F(2,318) = 13.87, p < .01$)。LSD法による多重比較の結果、「平均的短大生」、「平均的他者」、「平均的同学科生」の順に自己－他者得点が高かった ($LSD = 0.35, p < .05$)。「生き方」「経済力」「社交」「趣味や特技」「容貌」の側面においては、主効果と交互作用が全て有意でなかった。

全ての側面において、調査時期の効果が現れなかったことから、入学時と前期終了時で自己－他者得点は変化していないことが示された。

4. 考察

本研究の目的は、短期大学生生活のある2時点を取りあげ、平均以上効果（自己－他者得点）の変容を捉えることであった。入学直後と夏期休暇

前では、自己の否定性および他者の抽象性が変容していることが予想される。また従来は比較対象の抽象性を考慮しないワーディングが用いられてきたが、本研究では「平均的他者」、「平均的短大生」、「平均的同学科生」の3種のワードを用い比較対象の抽象性を操作した。またデータ収集後、比較対象の内容についても「知っている人」と「想像した人」の2つに分け、比較対象の抽象性が自己－他者得点に及ぼす影響を検討した。

(1) 比較対象の内容

調査の1回目と2回目の、比較対象の内容は、ともに同じ傾向が示された。つまり、「平均的他者」の内容は、「知っている人」であると答えた人数と「想像した人」であると答えた人数に差がなかった。「平均的短大生」は有意に「想像した人」が「知っている人」より多く、抽象性の高さが示された。反対に「平均的同学科生」は有意に「知っている人」が「想像した人」より多く、抽象性の低さが示された。したがって、予想していた抽象性の操作とは異なり、「平均的短大生」、「平均的他者」、「平均的同学科生」の順に抽象性が高いという結果になった。また、本研究では調査の1回目から2回目にかけて「平均的同学科生」の抽象性が低くなることを予想していたが、1回目から2回目で「想像した人」と「知っている人」の割合に変化はなく、入学直後と夏季休暇前で比較対象の抽象性はあまり変化していない可能性が考えられる。

(2) 平均以上効果と平均以下効果

平均以上効果が生じたのは、主に「まじめさ」と「優しさ」の側面であった。これは同じ側面を用いた伊藤（1999）とも一致する結果である。具体的には、内容が「想像した人」である「平均的短大生」の「まじめさ」が、1回目と2回目の調査とともに自己－他者得点が高かった。したがって想像上の平均的短大生より、自分がまじめであると認知する傾向が示された。さらに内容が「想像した人」である「平均的他者」と「平均的短大

生」の「優しさ」についても、1回目と2回目の調査でともに自己－他者得点が高かった。したがって想像上の平均的他者や平均的短大生より、自分が優しいと認知する傾向が示された。なお知っている平均的短大生についても、1回目の調査で有意傾向、2回目の調査で有意に自己－他者得点が高かった。

(3) 各側面における調査時期と比較対象とその内容の関係

本研究の結果では、全ての側面において、調査時期の効果が現れなかった。したがって当初に立てた予測と異なり、入学時と夏季休暇前で自己－他者得点は変化していないことが示された。比較対象の内容の分析結果でも、入学直後と夏季休暇前で比較対象の抽象性はあまり変化しなかった。本研究では、調査の1回目から2回目にかけて「平均的同學科生」の抽象性が低くなることを予想していたが、そのような変化が生じていないため、調査時期の効果が生じなかった可能性が考えられる。

また、比較対象の抽象性が自己－他者得点に及ぼす影響が、特定の側面において見られた。本研究の結果から大まかに述べると、全体、「学校の評判」、「スポーツ能力」、「知性」、「優しさ」の側面において、「平均的短大生」との比較時が「平均的他者」や「平均的同學科生」との比較時より自己－他者得点が高いことが示された。したがって、「平均的短大生」が比較対象である場合に、これらの側面において自己－他者得点が高まる可能性が考えられる。「平均的短大生」は、比較対象の内容の分析の結果、最も「想像した人」の割合が多く抽象性が高いと考えられる。そのため、抽象性の高さが平均以上効果を生じやすくしている可能性がある。

しかし「平均的同學科生」の「まじめさ」の側面においては、抽象性が低いはずである「知っている人」が、想像した「平均的同學科生」より自己－他者得点が有意に高かった。したがって、抽象性の高さが平均以上効果を生じやすくしている

と単純に結論づけることはできないだろう。しかし、本研究の結果から、少なくともこれらの側面は、比較対象の抽象性の影響を受けている可能性が示されている。そのため、今後は比較対象のワーディングについても留意して検討する必要があるだろう。

なお、「生き方」、「経済力」、「社交」、「趣味や特技」、「容貌」の側面には、比較対象の効果もその内容の効果も影響しておらず、比較対象の抽象性が影響しない可能性がある。少なくとも「経済力」、「社交」、「容貌」の側面は伊藤（1999）で述べられているように、評価される機会が多いため、他の側面よりも評価基準の曖昧さが低くなり、肯定的な自己評価傾向を盲目的に維持することが困難であることが原因と考えられる。

(4) 今後の課題

本研究では、入学直後と夏季休暇前で自己－他者得点に変化が生じなかったが、より長い調査期間を設定することで変容を捉えることが可能かもしれない。たとえば、入学直後と卒業直前では他者認知が異なる可能性が考えられる。この点は今後、検討すべき課題である。

また、抑うつ的な気分には陥っている時は、そうでない時より不幸な出来事を再生しやすいことが知られている（Clark & Teasdale, 1982）。さらに、このような気分一致効果は、特に自己に関する認知的過程に生じていると主張されている（Pyszczynski, Hamilton, Herring, & Greenberg, 1989）。これらのことから、平均以上効果は一時的な気分状態によって変化する可能性があるため、この点についても検討する必要がある。

また、調査者の期待通りに平均的他者が想起されて平均以上効果が生じているのではなく、単純に得手・不得手というような自己評価が反映されているだけではないかという指摘もあるため（Kruger, 1999；工藤, 2004）、ワーディング以外の操作によって、より「平均的他者」が想起されるように統制し、平均以上（以下）効果を再検討する方法を考える必要があるのではないだろうか。

謝 辞

本論文作成にあたり、執筆の機会を賜りました京都大学大学院教育学研究科教授やまだようこ先生、御指導、御助言を賜りました京都大学大学院教育学研究科助教授遠藤利彦先生、調査と分析に御協力いただきました四條畷学園短期大学講師北村瑞穂先生、および調査に御協力いただきました調査対象者の皆様に厚く御礼申し上げます。

参考文献

- Alicke, M. D. 1985 Global Self-Evaluation as determined by the desirability and controllability of trait adjectives. *Journal of Personality and Social Psychology*. 49, 1621-1630
- Alicke, M. D., Klotz, M. L., Breitenbecher, D. L., Yurak, T. J. & Vredenburg, D. S. 1995. Personal Contact, Individuation, and the Better-Than-Average Effect. *Journal of Personality and Social Psychology*. 68, 804-825
- Clark, D. M. & Teasdale, J. D. 1982 Diurnal variation in clinical depression and accessibility of memories of positive and negative experience. *Journal of Abnormal Psychology*, 91, 87-95
- 遠藤由美 1992 自己認知と自己評価の関係 ― 重みづけをした理想自己と現時自己の差異スコアからの検討 ― 教育心理学研究、40、157-163.
- 伊藤忠弘 1999 社会的比較における自己高揚傾向 心理学研究、70、367-374
- Kruger, J. 1999 Lake Wobegon be gone! The “below-average effect” and the egocentric nature of comparative ability judgments. *Journal of Personality and Social Psychology*. 77, 221-232
- 溝上慎一 1999 『自己の基礎理論 実証的心理学のパラダイム』 金子書房
- Pyszczynski, T., Hamilton, J. C., Herring, F. H., & Greenberg, J. 1989 Depression, self-focused attention, and negative memory bias. *Journal of Personality and Social Psychology*. 57, 351-357
- Taylor, S. E. & Brown, J. D. 1988 Illusion and well-being: A social psychological perspective on mental health. *Psychological Bulletin*. 103, 193-210
- 外山美樹・桜井茂男 2000 自己認知と精神的健康の関係 教育心理学研究、48、454-461
- 外山美樹・桜井茂男 2001 日本人におけるポジティブ・イリュージョン現象 心理学研究、72、329-335
- 山本真理子・松井豊・山成由紀子 1982 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究、30、64-68

注

- 1 本論文の一部は関西心理学会第116回大会で発表された。
- 2 外山・桜井(2001)はポジティブ幻想(positive illusion)についての研究であるが、特性について自己と平均的他者のあてはまりを比較するという評価方法が同様であることから、平均以上効果の検討と同一趣旨であるとみなした。外山・桜井(2000)も同じ理由による。

(21世紀 COE 教務補佐)